は大切だと本当に理解されているか。農業者だけでなく、国民全体が共有しなければ。そうなるための努力に私たちも先頭に立って取り組む。

－畑作地域出身の会長となるが。

都府県でも転作で麦や大豆を作る人は多い。農村を支え、食を作り出すという目指す場所は同じ。北海道より若手が少ない都府県で頑張っている青年農業者は、特にしっかり考えている人が多い。今、全国の農業も大規模化へ向かっており、その最先端が十勝。十勝で培ったものを還元できる。

■取材を終えて■

農村ホームステイをともに進めてきたＮＰＯ食の絆を育む会（浦幌町）の近江正隆理事長（43）、帯広市の畑作農家梶宗徳さん（40）と坂本龍馬の墓を訪れ、十勝から日本の食の価値観を変えようと誓った話が印象的だった。全国の若者をまとめ、変化が求められる農業界を先頭に立って導いていく行動力を感じた。

＜ＪＡ全青協＞

全国約６万2000人の青年農業者が加入。会長は毎年３月に46人の都道府県代表による選挙で選ばれる。５月28日の総会で正式に就任する。任期は１年。

ＪＡ池田、高島が合併検討へ 来年３月までに方向性

2014年４月22日

ＪＡ十勝池田町（鈴木雅博組合長、組合員285人）とＪＡ十勝高島（八木英光組合長、同192人）が合併に向けた協議に入ることが、22日午前に開かれたＪＡ十勝高島の総会で明らかになった。

近く両ＪＡによる検討委員会を立ち上げ、来年３月までに合併の方向性を示す。両ＪＡは同じ池田町内にあり、過去には近隣のＪＡ豊頃町、ＪＡうらほろを含めた合併協議が不調に終わっている。環太平洋連携協定（ＴＰＰ）などで農業情勢が厳しさを増している時期だけに、今回の合併協議再開は、ＪＡや農村地域の在り方、十勝農業の将来へ一石を投じるものとして注目される。

検討委は両ＪＡの役員を中心に構成し、池田町の農業ビジョンや新ＪＡの経営理念などを検討し、両ＪＡの組合員に示し、合併の方針をまとめる。

十勝高島の総会では、合併の検討委員会の設置を承認し、組合員から「高島地域の在り方をどう考えるのか」「地域の過疎化が心配される」など意見があり、八木組合長は「池田町全体を踏まえた中で皆さんが夢を持って経営できるビジョンを示したい」などと応えた。

十勝池田町は23日午前、町内で開く総会で検討委員会の設置を組合員へ諮る。

両ＪＡはＪＡ豊頃町、ＪＡうらほろを加えた４ＪＡで2002年９月に「十勝東部ＪＡ合併検討協議会」を立ち上げた。「国内外の農業情勢を考慮し、コスト削減の観点から合併は避けられない」との認識で一致したが、十勝池田町が「合併は時期尚早」として04年３月に協議会を退会、事実上、合併協議は凍結された。

今回の合併協議の再開について八木組合長は「農政の動きが早く、地域のＪＡと行政が一丸となって農業の基盤をつくる必要がある」と合併の必要性を強調している。

十勝池田町は、1989年に利別、池田両農協が合併して誕生。13年度の農業生産額は58億7000万円。十勝高島の同年度の農業生産額は25億7465万円。

十勝農協連副会長に西岡氏（JA 陸別町） 山本会長を再任

2014年６月14日

十勝農協連の通常総会が14日午前11時、帯広市内の農協連ビルで開かれた。総会後の理事会で山本勝博会長（72）を再任、柴田賢一副会長（ＪＡ木野前組合長）の辞任で空席となっていた副会長にはＪＡ陸別町組合長の西岡悦夫氏（65）が就いた。

会員全24ＪＡが出席。山本会長は「十勝農業の生産基盤強化と消費者から十勝産農産物、畜産物の安全に対する信頼を一層高めるための体制づくりを推進してきた。剰余金など（昨年度事業が）当初の計画を上回ったことは会員、組合員の支援、協力のおかげ」と話した＝写真。

専務の佐藤文俊氏は退任し、学識経験者（十勝農協連参与）の高橋英三氏（62）が新たに専務に就いた。

2013年度事業利益は前年度比26％減の３億5202万円、当期剰余金は同25･1％減の２億7413万円だったことが報告された。

その他の役員は次の通り。（敬称略、かっこ内は所属ＪＡ）